



梅雨明けも間近? 校舎入口の額紫陽花

2015年度 学友会入部届 集計

	中1	中2	中3	中学 合計	高1	高2	高3	高校 合計	総部 員数	中学部長	中学副部長	中学マネージャー	高校部長	高校副部長	高校マネージャー	
学友部	英語部	0	2	0	2	1	6	6	13	15	(中高一緒に活動)			高3-4 澤田正輝		
	演劇部	6	2	3	11	1	1	5	7	18				高3-3 山崎立樹		
	科学部	3	2	2	7	2	8	1	11	18	中3-4 島袋 泰盛		中3-3 遠藤直樹	高3-2 松本 典	高2-2 大倉 智貴	高2-3 古池悠大
	写真部	0	4	3	7	9	1	1	11	18	(中高一緒に活動)					
	吹奏楽部	15	10	5	30	10	9	6	25	55	中3-2 平塚 凱	中3-2 中村 脩人 中3-4 田中 聡一郎		高2-1 小島 正吾	高2-1 日比野哲也 高2-4 高橋 一哉	
	数理研究部	4	10	12	26	11	2	8	21	47		中3-1 橋本世央 中3-3 小川翔平		高3-1 湯浅弘基		高3-1 三村舟生
	生物部	4	4	0	8	1	3	3	7	15	中2-3 佐藤 悠紀				高3-2 郭 承澁	高2-1 河野 周
	聖ポーロ会	0	0	0	0	0	0	3	3	3						
	地歴研究部	2	1	6	9	0	5	5	10	19	(中高一緒に活動)			高3-4 伊藤エドワード		
	天文部	3	0	4	7	2	0	0	2	9				高1-3 外山 和樹		
	美術部	2	3	7	12	5	4	1	10	22	(中高一緒に活動)					
	文芸部	0	2	0	2	1	9	0	10	12	(中高一緒に活動)					
	放送研究部	1	7	2	10	7	0	2	9	19	(中高一緒に活動)			高3-1 門脇 啓幸		
	鉄道研究同好会	5	3	4	12	0	1	5	6	18	(中高一緒に活動)			高3-4 吉田 有登	高3-3 佐藤 樹	高3-4 伊藤エドワード
	クワイアー	5	1	0	6	3	0	10	13	19	(中高一緒に活動)			高3-1 福島 啓	高3-2 浅野 皓貴 高1-3 馬場光太	
(アコライト)	3	1	1	5	2	3	2	7	12	(中高一緒に活動)			高3-4 酒井俊幸			
運動部	剣道部	3	7	4	14	3	6	4	13	27	中3-2 伊東 征哉			高3-2 飯森 康太		
	ゴルフ部	7	4	5	16	10	11	15	36	52	(中高一緒に活動)			高3-1 福田 博之	高3-1 鶴田 宙大 高3-3 永尾 瑠希	
	サッカー部	14	20	15	49	18	16	13	47	96	中3-2 田中井 大歩	中3-2 千島 龍 中3-3 松本 健爾	中3-4 土田 亮	高3-3 渡辺 健太郎	高3-2 本田 大晟 高3-3 澤村 郁来	高2-3 佐久山颯人
	山岳スキー部	1	7	5	13	4	6	1	11	24	中3-1 柳川 誠一郎	中3-4 野邊 倭	中3-4 相坂 祐樹	高3-4 織部 翔	高2-3 小川ルーク	高2-2 伊藤 拓美
	水泳部	7	10	9	26	8	4	8	20	46	中3-1 小畑 大貴	中3-4 高野 大希	中3-1 渡邊 翔太	高3-4 田中 光	高3-1 渡部 雄一郎	高3-4 山村 昌斗
	卓球部	14	11	14	39	1	1	6	8	47	中3-4 小川 麻博	中3-2 宮原 健人	中3-1 王 弥	高3-2 鈴木 大志	高3-2 島村 亮啓 高3-1 福島 啓	高3-2 並木 大真 高3-4 吉田 有登
	庭球部	20	15	13	48	20	16	15	51	99	中3-2 齋藤 隼輝	中3-3 小島 健太	中3-3 地主 大起	高3-4 高橋 暉	高3-1 齋藤 航輝	高3-2 小島 怜央 高3-3 宮川 真央
	バスケットボール部	16	25	15	56	10	9	7	26	82	中3-4 松岡 龍生	中3-1 小林 呂伊	中3-3 霜田 龍一 中3-4 平井 伸之	高3-4 小林 怜央	高3-1 各務 雄吏	高3-4 定井 陽樹
	野球部	11	8	14	33	19	13	11	43	76	中3-1 安田 陽	中3-1 伊東 良起 中3-4 福嶋 裕貴		高3-4 吉永 海	高3-4 藤川 優 高3-1 高橋孝太郎	
	陸上競技部	5	3	10	18	9	13	9	31	49	中3-3 阿部 浩茂	中3-3 渡邊 英人	中3-1 野村 優太	高3-2 大野 裕貴	高3-2 本橋 佳樹	高3-2 五十嵐 雪将
	釣り同好会	5	6	3	14	7	1	4	12	26	(中高一緒に活動)			高3-3 早川 風海	高2-2 神田 和慧	

※兼部の生徒も含まれます。なお、三役の呼称は、部・会により異なります。

CCESよりお客様

六月七日(日)より二十一日(日)の二週間、交換プログラムを行っているCCES(米国サウスカロライナ州)から引率のHarry Trantham先生はじめ三名の生徒(Paul Rogers君、Michael Rothgaber君、Beck Ryan Chandler君)が本校に短期留学しました。

期間中は、本校生徒小俣君、馬場君(高一)、石塚君、小畑君(中三)の各家庭にホームステイし、各メンバーのホームルームで本校



相撲部屋の見学

生徒とも交流を深めました。さらに、相撲の高砂部屋の見学や京都・奈良など関西方面への小旅行で日本文化への理解を深めたようです。特にHarry先生は、歌舞伎や建築など、日本文化にも造詣が深い知日派。

今後とも日米の架け橋としてのこのプログラムのますますの発展が期待されます。生徒諸君も臆せず、春休みのCCES短期留学に参加し、また、ホームステイのホストを経験することにより、立教と日本を伝えてもらえればと思います。

中学一年便り

強い意志と日々の努力

日本のテニス界を将来リードすることが期待されている、若手の選手を集めた強化練習会での話。

レッスンはたくさんコートを使って行われる予定だったが、当日は雨が降り、コート面数の少ない屋内施設で行わざるを得なかった。そのためコート一面当たりに大勢の選手が集まった。少ない人数でのびのびと充実した練習を期待して集まった選手は多くは、屋内コートでの単調な練習に不満があったという。

その中、一人倍足を動かして練習に取り組む女性選手がいた。他の選手は単調にスマッシュの練習をしている中、彼女はボールを打った後、走って前に詰めネットにタッチし、再び出されたボールを越すような山なりのボールを、後ろに下がって追いかけた。誰に指示されることもなく、前後のフットワークを鍛えるべく自ら負荷をかけ、与えられた練習に精一杯取り組んだという。

彼女の名は「杉山愛」。この練習会の頃はまだ一般的には無名だった彼女も、その後、特にダブルスで活躍し、世界に名の知れた選手となった。天才的に見える彼女のプレーも、実はこうした強い意志と日々の努力に裏打ちされたものであるといえる。

さて、諸君の誰もが将来自信をもって活躍したいと願っていることだろう。自分を律する強い意志と、小さな事にも精一杯取り組む日々の努力。中学最初の学期が終わったこの時期、自分の生活にこれらが大切にされているか見直してほしい。

(重原康秀)

中学二年便り

パイロットに学ぶ

普段、理由を考えてから行動することがあるであろうか。

某航空会社のパイロットと話す機会があった。様々なものが機械化された現在でも、飛行中、常に最善の飛び方を考え続け、コックピットの中は緊張感でいっぱいであるという。話の中で最も印象的であったのが、パイロットはどんな行動にも理由をつけなければならない。いつ食事や休憩をとるのかでさえも、説明できるような理由をいなければならない。何百人の乗客の命を預かっている責任感を非常に感じた。

さて、中二になっていよいよ君たちも先輩とよばれるようになった。今までは自分のことだけを考えていたけれど、これからは学校を引っ張っていく立場になるのである。そこで、このパイロットが何気なくやっている理由付けを実践してみるのはどうだろうか。自分の行動を振り返り、反省することはこれまで述べているのは、先を見通してやるべきことを決定することだ。今何をすべきか、何が求められているのかを深く考え、よりよい方法を提案し実現する力をつけるのである。周りをよくみて、観察する目を養い、また、自分を見つめる機会を生み出すであろう。何気ない行動からでもよい。今から少しずつ意識してほしい。理由付けが君たちに責任と教える、上級生としての行動に自信もたせてくれるであろう。これから先、どうもできないであろう難しい問題に出会うことは避けられない。それをオブラートに包むような生き方は薦めない。そんなときにこの訓練がきっと役立つはずである。君たちの成長を大いに期待している。

(西方一平)

中学三年便り

夏に燃え、夏に挑め

誕生日がくると十五歳になる中学三年生諸君、君はまだ子どもか？それとも、もう大人か？

成長には早い遅いもあり、考え方は様々だけど、子どもと大人の違いって抽象的な思考ができるかどうかだ。生きているって何だろう。何のために生きるか。「人間らしく生きる」となることさらに難しくなるのかな。「死ぬ」まで命を保つて活動できる状態にあることを「生きる」と言ってしまう。いのちの生かされ、人を生かす中で様々な「生きる」を体験している。中学生には無理な話だが、生活者として自分(一家)の生計を立てるために「生きる」、好きなことに熱中したり調子がいっぱい「生きる」、他者のために役に立っていると思えるときにも「生きる」、甲斐を感じるもの。

「人間到る所青山あり」とは、幕末の僧・月性の詩から――故郷だけが人の活動し、骨を埋める土地とは限らない。大いに広い世間に出て活躍すべきだ――との教え。さしずめ、今の時代なら国内のみならず海外・宇宙へとその場を求めよ、ということになるだろう。

宿題・課題を平気でやっつけない。期限を過ぎても提出物を出さない。堅実な低めの目標に甘んじて冒険をしない――そんな自分とさっぱりとおさらばして、新しい自分を築く夏。中三の夏は、そんな挑戦のできる貴重な夏でもあるんだよ。

(猿子和夫)

高校一年便り

成長への糧にする夏

梅雨明けが待ち遠しい今日この頃、高校一年生の前期が終わろうとしています。四月に新しい仲間と共に入学して三ヶ月が経ち、生活面で自由の幅が広がる一方、将来を見据えての厳しい戦いも幕を開けたと思います。

さて、皆さんは毎日どのように過ごしていますか。課題、テスト、提出物、部活動等、充実した日々を送っていることと思います。そんな毎日を支える土台となるのは生活面です。

学校での生活面では、先生方、友達、先輩、後輩との挨拶、服装、授業中の態度なども様々挙げられますが、どれも当たり前のことばかりです。しかし、その当たり前のことを当たり前に行なうことが大切だと思いませんか。誰にでもできることを疎かにせずに学校生活を送ることが、大人になるための一歩とも言えるでしょう。

生活面での基盤を作り上げることで、学校生活だけでなく、私生活もより充実したものになると思います。五月の特別プログラムを経て、将来の自分の未来像が見えてきた人もいます。立派な社会人になるためにまず、当たり前のことをひとつひとつこなし、いきたいと思います。

(田部達弥)

高校二年便り

情熱と対象

梅雨が明け、いよいよ夏本番の季節を迎えようとしている。私事だが、夏といえば頭に浮かぶことはやはり高校野球である。今でも一六年前の夏をしばしば思い出す。当時の私は、野球に全てを捧げていた。正しく言えば野球しか熱中できなかった。ただただ、母校の一年振りの甲子園出場を目指し、それを使命と責任と認識し、必死に努力していた記憶しかない。しかし、こんな球児は全国に五万といるわけだ、結局甲子園には出場できなかったのも事実である。

前置きが長くなったが私が伝えたいことは、何か一つの事に懸けられる思いがあるか、その覚悟が君たちにあるのかということだ。なにも部活に全てを捧げると言っているのではない。対象は何でも良い。大切なことは、それに情熱を注いでいるかである。もつと言えはその対象が見つかったのか、君たちに聞きたい。今の私は夢であった教職に就くことができず毎日を過ごしているのだが、時には辛い時もある。そこで次の一歩を踏み出す原動力は、間違いなく高校野球で培った経験と習慣と感情である。ぶれない自分の根幹はそれである。今の自分が将来の自分を作り、今の経験が将来の原動力になることだけは君たちに声を大にして伝えたい。さあ、とことんやりたまえ！

(梅野伸也)

高校三年便り

雑感

梅雨でぬれた草々をよくみると、青いトマトを見出します。きゅうりもあります。うちの畑の様子です。ブルーベリーもだいぶ熟してきて、ヨーグルトにまぜて食べます。旬の野菜や果物で移ろいゆく季節が感じられます。

学校では行事や試験でしよるか。温水プールで、プールの季節感は無くなりましたが、試験は惜しいことに無くなりません。勉強する体力のある者が、勉強量に応じた結果を得たかと思えます。体力が大事ですね。補習や面接にくるような生徒で欠伸をする生徒を多くみかけます。勉強する体力がないのです。読書と計算(数学)・作文で勉強体力が養成できます。

高三ではそろそろ進路を決めなければなりません。大相撲では入門力士のうち一割ほどが「関取」になれるそうです。プロ野球選手にいたっては、まず入団がきびしいし、そこから一軍にのぼるのも大変です。そんな中で出世の如何に関係なくきちんとした人を送っているのは、進路を自分で決めた人たちだそうなんです。自分で決めるのが一番いいということです。将棋の師匠も才能があると見込んで、声をかけることはしません。

この夏、卒論に汗をかこうとしよう。自分で決めたテーマはありますが、調べるほどに巨大な壁を感じて一歩も前へ進めなくなることでしよう。誘惑に落ちることのないよう健闘を祈ります。

(宇津木千秋)

十 今月の聖句

「地の続くかぎり、種蒔きも刈り入れも、寒さも暑さも、夏も冬も、昼も夜も、やむことはない。」

(創世記 8章 22節)

洪水後に方舟から外に出たノアたちに、神は「二度と地を滅ぼすことはしない」と約束し、この言葉を告げる。この世界のすべては、神の恵みのもとにある。季節の変化を感じるとき、そこに神への賛美と感謝を感じる心を持ちたいもの。